自治労京都府本部第3 次訪中団の記

感慨深き 日中友好、熱烈歓迎に 感激

谷口富士夫

4000年の歴史、広大な面積、世界一人口の多い国。近年の急速な開発と経済の発展、一方にある複雑な対日感情。道路を占拠するほどの自転車大国、豊富な食材からなる中華料理、太極拳・カンフーの達人たち……。出発前の中国に対する私の品疎なイメージ。

自治労京都府本部が中国陝西省総工会および直属機関工会と交流をし、三度目となる訪中団に参加する機会を得た。10月14日から21日までの７泊８日の日程で西安市・杭州・上海を訪れた。村上副委員長を団長として、全員で６名の参加となった。

府本部と陝西省機関工会との交流は、2000年に羽室委員長を団長として訪中してから始まった。01年秋に中国代表団が訪日、その後、03年の予定はサーズ（中国を中心とした新型肺炎、重症急性呼吸器症候群ＳＡＲＳ）の影響を受け一年延期となり、04年に第２次の訪中、団長は木村委員長が努めた。05年に中国からの第二次訪日団を受け入れた。この時、中国側の要望として、毎年の交流でもよいのではという雰囲気があったため、今後は経費的な側面から２年度ごとという一応の約束をしたのである。

私は、２次の訪日団受け入れから関わり、そのときのメンバーに「谷口さんは中国に来たことはありますか？　西安はご存知ですか？」と聞かれ「ありません」と答えると「次回はぜひ来てください。もう古い親友ですから約束ですよ」と念を押されてしまった。中国では一度あいさつを交わせば『古い親友』となるらしい。

私の中国へのイメージは冒頭に続き『乾杯！（かんぺい）』の一気飲み、生水は飲めない、おなか注意、３食ともお決まりの中華料理、田舎のトイレは非衛生的……などなど、あまりいい印象を持っていなかった。全て、中国を訪れた人からの冗談半分の会話で得た情報なのだが。したがって、出発前は昨年の訪日団との懇親会でのすごい二日酔い、またカンボジアで腹痛を経験した両方の記憶も重なり「海外出張で気分るんるん」とならなかったことも確か。実際に訪れてみれば、機関工会の配慮もあり「聞くと見るとは大違い」といえるほどであった。ちなみに、出発前息子がクイズで「世界中で一番使われている言葉はなに？」と聞いてきた。一瞬、英語だろうかと思いつつクイズの特性から一般的な答ではないと気付き、「中国語や。人口が一番多いから」息子は「何でわかんねん。と不満そう。そして、「中国行ったらお土産かってきてや」と一言。

西安へ出発

訪中期間中は、室内の会議中心の時には雨、郊外の観光時には晴れと、天候もきわめて友好的。出発日も晴天で、やはり飛行機は鮮やかなスカイブルーに飛び立つのが気持ちいい。しかし、自分自身でも嫌な偏見だと思いながら中国の飛行機（中国東方航空）というだけで、少しの振動に不安感を抱いてしまう。

「西安は内陸気候で穏やかだが、朝夕は少し冷え込む。京都の11月ぐらいのイメージ」と聞いていたが、温暖化の影響？　ほとんど寒さは感じなかった。現地の人もいつもより暖かいと話していた。今年の秋は日本も異常なくらいの暖かさ。思えば一月前にその兆候を実感していたことになる。

関西空港を定時に飛び立ち（案外めずらしいことらしい）、上海で入国審査後、飛行機を乗り継ぎ西安へ。しかし上海はさすがに中国の玄関口、いろんな人種が審査を待っている。目を引いたのは若い黒人のグループ。スタイルといい足の長さといい、隣に並んだ我々とは違いすぎる。「どこまでが腰？」と同行したメンバーがあきれた顔。

西安到着は午後８時30分、時差はマイナス１時間だから日本時間では９時30分だ。夜遅いというのに、機関工会から崔主任（委員長）と劉副主任（副委員長）、通訳の李紅燕さん３名が来られていた。手厚い出迎えだと感じたが、この感じは交流期間中続くことになる。劉さん、李さんが変わっておられなくて安心したが、よく考えるとまだ一年数ヶ月ぶりの再会だった。異国の地での再会は、なぜか時間的な感覚が麻痺して数年ぶりのような気がしていた。

西安市内へは50ｋｍで、40～50分程度。現在でも高速道路は急ピッチで建設が進んでいるらしい。橋梁のライトアップやイルミネーションは、日本よりも派手な色使い。はじめての訪中だけによく知らなかったが、中国は夜間の光の使い方が豪快である。看板にかかるネオンやビルの屋上に飾られたイルミネーションは、日本のクリスマスシーズンを彷彿とさせる。

市内へ向かうバスで、李さんが中国や西安の概況などの説明を始めた。「水を得た魚」という表現が当てはまるほど、次から次へと言葉が出てくる。メモはとても追いつかない。人口は13億人との公表はあるが実際はもっと多いらしい。面積960万平方キロで日本の26倍、56の民族のうち93.3%が漢民族、23省５自治区４直轄市、北京時間で統一されているが実際４時間程度の時差がある。同じ日の気温差がマイナス23℃からプラス23℃などなど。

そのとき「あ！」と驚くことがおこった。前方の道路を人が横切った。ここは高速道路のはず。後にして思えば、中国ではごく当たり前の光景だが、到着して間もないだけに、驚きは大きかった。

陝西省の人口は3690万、面積20.6万平方キロ。日本の本州よりも少し小さく、人口は近畿地方＋中国地方＋四国より少し多いぐらい。

今回の視察の中心となる西安市は、中国史上初めて全国統一を果たした秦の始皇帝が咸陽に都を設置した歴史的な都市。13の王朝が1062年間にわたり西安を都とし、歴史的には「長安の都」として知られている。人口716万人、面積約１万平方キロ、気温は32℃から０℃。李さんの説明は山形県に大阪府の人口とあったようだが、調べると青森県ぐらいの面積に愛知県の人口という感じ。神奈川県と同じぐらいの緯度となるようだ。

日本語では「せいあん」というが、現地では「シーアン」と発音し、英語標記は“xi’an”、この“x”が最初に来る単語にあまり馴染みがなく、なぜかお洒落な感じがした。西安は城壁の都といわれ、街の中心部が城壁で囲まれている。もちろん道路は整備されていて塀の中と外は自由に行き来できる。ただし、交通事情でいうと出入り口が制限されるため渋滞の原因となっているのは確かだ。この城壁自体が西安の歴史を物語っていることもあり、街のシンボルとして存在している。その他、重要文物遺跡、博物館や記念館などが多数あり、世界的に有名な観光都市ということも合せて、日本の京都と似ている。実際に1975年に友好姉妹都市として提携している。

初日は当初の予定では、到着が遅いこともあり、

西安碑林博物館の前で

昨年開設したテーマパーク「大唐芙蓉園」

街の中心に立つ「鐘楼」から

到着後の食事は麺類などの軽いものでいいと考えていた。しかし、案内された場所は豪華な中華料理レストラン（大香港鮑翅酒狼樓）で、次々出される料理に全員が大満足。劉さんの手配なのだが、劉さんは観光を含む全工程に同行していただき、さらに食事場所やメニューも事前に調査、我々を飽きさせない心使いに敬服させられた。実は私と劉さんとは同年で誕生日も近いこともあり、昨年の訪日の時から懇親を深めていた。

２日目は日曜日でもあり西安市内見学。石の図書館といわれる碑林館では、国宝が134あり、世界遺産として予備登録しているとのこと。石に彫られた見事な文字が延々と連なっている。日本の元号「昭和・平成」の基となった石版もあり、中国の歴史と文化が日本に大きく影響していることを一同が再認識する。その後、西の城門や歴史博物館、張学良公館、大雁塔など見学したがどこへ行っても日本人向けのお土産が用意してあり商売上手に舌を巻く。一元が約16円で物価はそれほど高くないと聞いていたが、売り子さんに勧められる物の値打ちが分からないため、戸惑うことも多かった。夜は、西安に最近できたテーマパーク「大唐芙蓉園」でアトラクションを楽しむ。設備が池の中にあり、昨年開設されたので全体が新しく、光、水、炎、音楽で物語を進めて行く。内容は中国語なので分からないが、幻想的な雰囲気と近代技術が溶け合い見事なものだ。中国版ＵＳＪウォターワールドといったところ。

陝西省機関工会総工会では手厚い歓迎

３日目、いよいよ重要な公式訪問となる。朝から村上団長も緊張気味だ。まずは陝西省総工会へ。ホテルから徒歩５分ほどの近距離にあるが城壁の外と中（ホテルが外）、雨も降り、バスでの異動のため大通りを使いながら事務所へ向かう。都市の朝はどこでも渋滞だ。西安もご多分に漏れず車があふれている。しかも、中国の交通事情は半端ではない。まず、車線の区分は無意味で、強引な割り込み、クラクションの連発、自転車も荷物車も前面にスペースがあればどんどん進んでくる。ロータリー式の広い交差点では、右から左からどんどん車が入れ替わる。その中を人が、自動車をよけながら悠々と横断する。バスの中で、自分の運転経験ではとてもこの国では通用しないと感心しきり。

総工会では、顧東武副主席と呉斯全国際部長に迎えられた。この総工会は公務を含めた産業別組合を組織し、33産別、364万人の労働者が組織する。20の直属大企業労組もある。日本で言えば連合にあたる。連合京都とも交流を深めており、我々が

訪中する一月前に連合京都のメンバーが熱烈な歓迎を受けている。顧副主席はまず「安倍首相は日中関係を考えている」とあいさつ。首相に就任しすぐに中国・韓国を訪れたことを評価しているようだが、社交辞令だろう。中国は共産党の一党支配で政府と党との関係も直接的、党と労働組合との関係も上下関係だと聞く。我々のような、打倒自民党政府を掲げて運動している立場からいうと、安倍政権そのものを否定したくなるが、しかしまあ、友好的な日中関係を維持するための訪中であるから、全員が通訳される言葉に笑顔で頷く。

続いて村上団長がお礼のあいさつ。無事に第一弾の任務を終えて村上さんはほっとした顔となる。この訪問から感じたのだが、中国では来客にフルーツを勧める。かごに盛られたバナナやみかん、りんご、ざくろなどをしきりに勧められた。日本ではどちらかというと飾り的に使われていたり、お土産としてあったりだから、なかなか公式の場でバナナは食べにくい。「郷にいっては郷に従え」というものの、どのくらい食べればよいかもさっぱりだ。私は一口だけとさせてもらった。お土産にいただいた『マジック急須（本当の呼び名は倒装壺)』は底にお湯の注ぎ口があり、ひっくり返しても漏れない仕組みとなっている。顧さんの実演付で全員に用意していただいた。

日本からは電子体温計。中国の人たちに人気なのは、日本製の家電製品と聞く。パソコン、デジカメ、メモリー機器（音楽用含む)、ゲーム機など。しかも日本製というところが重要だ。電子体温計も高価で一般的でないらしい。体温計を京都で購入しようと各店を当たった。しかし、日本でも有名な某メーカーの体温計は全て中国製、今回はなんとか別のメーカーで日本製が見つけられた。他の家電製品のメーカーも調べるが、やはり“Made in china”強し。蛇足ついでに、こちらかのお土産は「なるべく嵩張らない物を」と考えたのだが、大国の感覚は、「大きいことはいいことだ」の乗りで困った。持って行ったお土産分のスペースが空いて、帰りは充分な容量ができると思ったのはこ

会議はフルーツを食べながら

の日まで。重量・嵩ともに２日目にしてもうオーバー気味である。

公立幼稚園では給食現場も視察

続いて、公立幼稚園を訪問。今回は延安での植樹の代わりに、給食の現場を視察する。幼稚園となったのは、小中学校は自宅に帰って昼食をとるらしい。実際に昼時に市内を通ると下校する生徒たちがたくさんいる。一旦帰ってまた学校に行くというのだ。邪魔くさくないのだろうか？　また、交通事情からくる安全面は大丈夫か？　家に帰って昼ご飯は誰が作るの？　日本と違う習慣におのずと疑問が湧いてくるが、通訳の李さんに質問する機会を失った。中国は人口調整で一人っ子政策が採られている。その背景にあるいろいろな問題（２人目は戸籍登録しないなど）もあるようだが、詳しくは聞けなかった。私には３人の子どもがいると知ると、劉さん、李さんとも羨ましいと。

幼稚園では、お絵かき・ピアノ・英語・ダンスなどを園児が楽しく学んでいる教室へ案内していただいた。興味津々で来園者を見つめる瞳は、どの国の子どもも同じ。描く内容やモチーフ、色使いは、その国の特徴がでているとは思うが、私の子どもが同時期に書いたものより表現が豊かなように感じた。芸術性を伸ばそうとするこの園の教育性が出ているのだろう。給食の調理場にも案内していただいたが、専門的な知識が無いためによく分からない。15クラス500人と聞いたが、朝・昼・晩、おやつを含め３食分以上を作るスペース

カンペイによる熱烈な歓迎会

としては少し狭いようにも思えた。昼食時間になり、子どもたちが食べているところも見学したが、日本のように主食・副食というものではなく、一見、具の多いチャーハンのような料理一品だけであった。体格のしっかりした子どもがおかわりする横で、小柄な子どもはあまり食べていない。先生がしっかり食べなさいと注意している姿は、日本の給食風景と重なる。単品でも一日の栄養のバランスは考えてあるという。

陝西省機関工会との交流会

午後から、いよいよ機関工会との交流会。昨年、来日した王錦春副書記とも再会し、友好を深める。機関工会のメンバーは総勢12名、財政省、気象局、人民医院工会、陝西日報社などなど。名刺交換したものの、漢字が読めずに肩書きが分からない人も。王副書記が「中国の諺に『友遠方から来る。また楽しからずや』とあり、再会を楽しみにしていました」とあいさつ。次に崔主任の状況報告、「機関工会は97の組織(共産党を含む)直属82、179の単組で構成され２万３千人の組合員。歳入は公開法に基づいて、① 労働組合費（会費）0.5%、② 法律に基づいた経費＝給与の20%、③ 事業の収益、④ 行政部門からの補助金からなり、仕事の内容は『保護・参加・教育・建設』。共産党指導のもと仕事をし、政府との架け橋や政策の実現をめざす」。日本の状況と違うため、理解しづらい面もあるが、全ての労働者の組合結集をめざし、知識の向上や素質を高めるという方針は、自治労の組織拡大や質の高い公共サービスと同じだ。その意味では、社会における労働組合の役割は普遍的である。

環境問題についての意見交換は、環境局副局長が出席。「大気汚染という面では現在４つの指標、ＳＯ２（硫黄酸化物）・ＣＯ２（二酸化炭素）・ＴＳＰ（総浮遊粒子状物質）・チリの対策について取り組みを行っている。その背景には、酸性雨の拡大がある。新しい石炭火力発電所には脱硫設備を設置し、旧工場を５年間で半分にする計画」。また、前回の訪日団で行った植樹に関しては３月12日を「植樹の日」として機関工会全員で取り組みを行っているとのこと。訪中してから分かったが、延安まで高速道路も整備され、以前は片道６時間ぐらいかかったところが今や２～３時間で行けるらしい。10月１日開通したばかりでその情報も入っていなかったため、今回は実施しなかったが次の機会にはぜひとも環境問題の取り組みとして訪れたいものである。しかし、延安までの時間を聞くと地位の上の人が時間を短く答えるのは興味深い。少し誇張しているのかそれとも乗っていく車の性能の違いか。京都市のごみ袋有料化などの状況も伝えながら有意義な時間を過ごす。村上団長第２弾のあいさつも無事終了。

日Pも参加した歓迎宴会

いよいよ３日目のメインイベント、歓迎宴会は午後６時から始まった。メインとなったのは、陝西省直属機関工作委員会　李順民書記が出席することになったからだ。随行（本人の肩書きは顧問）の矢代さんが、その話を聞いたときに相当驚いていた。我々は、はっきり言って中国共産党と政府（公的機関）・労働組合の関係が分かりづらい。前述したように上下関係にあり指導があるという

ことは訪日の際に聞いたが、実際にどの程度まで党が関わっているのかは不明だ。昨年の訪日団に王副書記が団長で来られた時も、矢代さんは「大物が来るで。府本部もそれなりの対応が必要や」といっていたが、その大物のさらに上司とのこと。李書記の歓迎あいさつの後、村上団長のあいさつ。緊張もピークか？　と思うも、立派にこなし乾杯に入る。さあ『乾杯（カンペイ）』儀式の始まりだ。

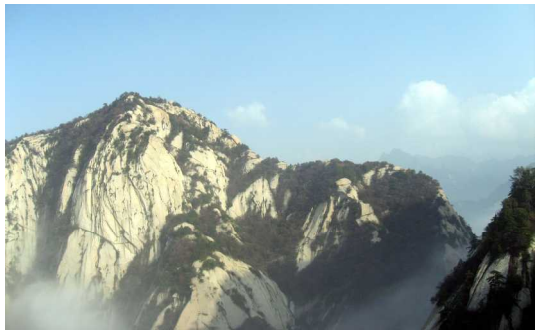
中国の人との付き合いで、特に注意がいるとされている『乾杯』。公式の場であるからこそ、合せた杯を一気に飲み干すこの儀式に酔いつぶれる人が続出する。グラスは30ccぐらいが入るガラス製の小ぶりなもの。ただし、そこに注ぐお酒が50度ぐらいの白酒（パイチュウ）が主流、この会場では高級な15年もの栖鳳酒が出された。

飲み込むと花のような独特な香りが口の中に広がる……がしかし、その後きついアルコール成分が体中を駆け巡る。まず、全体の乾杯、李書記による歓迎の乾杯、それから出席者が随時、個人個人で乾杯。飲み干すのがマナーであるから、一杯は少量でも相手や回数が多いと限度オーバーは早い。しかも、お酒が少し強いと見られると『サンペイ（三杯）』といって、一気飲み３回を迫ってくる参加者もあり中国式ノミニケーションは大変だ。ただし、最近は飲めないといえば無理強いはしないとのこと。いくら中国人といえども、全ての人の肝臓が鉄のように強わけではないらしい。

私はどちらかといえば飲めるほうなので、相手に合せて乾杯をしていたが、お酒の間にお茶を多めに飲んでアルコール成分を薄めた。栖鳳酒自体が蒸留酒であり、おかげで翌日に残ることは無かった。用意された会席料理も大変素晴らしく、生演奏の音楽にのったダンスや唄で友好がさらに深められた。大いに盛り上がった歓迎会も無事に終了し、第３次訪中団の目的はほぼ達成できた。

人生の何年分にも匹敵する感動に感謝

４日目は西安市郊外の見学。玄宗皇帝と楊貴妃および蒋介石にまつわる華清池、近辺の道路が駐



中国五岳の一つ、華山

市内の市場

停車禁止となった秦の始皇帝陵、兵隊の像が並ぶ世界遺産・兵馬庸、中国五岳・華山（2160m）、と名勝の各地に訪れる。西安４泊後、杭州（１泊）へ、そして最後に上海（２泊）を視察し全日程終了。後半の見学・視察の感想はまた別の機会とする。我々が経験したことは、広大な中国のほんの一部だろうが、歴史と文化、雄大な自然、近代的な都市、水と光のハーモニー、文字だけでは表せない素晴らしさを実感できた。ただ、一つだけ残念なのは紹興酒を飲みすぎて１日ダウンしてしまったこと。栖鳳酒は気をつけていたのだが、紹興酒は度数が低く、例の「サンペイ」を多く受けてしまった。後で聞くと日本酒と同じように次の日は残るらしい。

報告の最後に、全日程同行していただいた劉さんには細部にわたる大変な心遣いで、われわれを歓迎していただき本当に心から感謝する。「最後の晩餐」での劉さんのあいさつに涙がほろり。この訪中は私の人生ではわずかな一週間ではあった。しかし、何年分にも匹敵する感動を与えていただいた。あらためて中国の友人に心から感謝をする。

（たにぐち　ふじお・自治労京都府本部書記長）